

目的 アイヌ民族の衣服形態は和服の仕事着に似て袖はもじり袖の筒袖で丈は脛丈で裾はつかない。江戸時代以前の民族服は獣皮衣、鳥羽衣、樹皮草衣が主であった。布衣の使用は江戸初期頃からで交易に依って多くの国々からの影響に依るものが多い。

アイヌ民族の衣服の構成は樹皮と布からなり、縫製方法は和縫いとアイヌ縫いの二つの方法に依る。今回天理大学附属天理参考館の資料を中心に布の構成及び布の種類、寸法について考察を及ぼした。

方法 古文書の文献調査及び天理参考館の資料調査に依る。

結果 天理参考館の資料は昭和40年頃を中心に北海道道南地域の資料を中心にして集めたものである。当時のアイヌ民族が保存し着用していたものであるが、衣服の構成方法は様々で身体寸法にあわせて作られたものでなく、布巾から5寸又は1寸の縫代を除いた寸法が衣服の仕立て上げ寸法である。また衣服に男女の性差がなく、わづかに手に入った男物袴長着にアツプリケや刺繍をほどこして衣服や形体的に大きなものが男性用と認められた。和服との比較に依って素材は實業な木綿であるが、刺繍やアツプリケによって牙ものけ時同もかけた豪華な衣服と、金糸銀糸の絹織物の小袖等と比較すると、北國での女性の素材が豪華に感じられるものである。アイヌ民族の衣服の紋様が佻性的であると同じように、衣服構成も形式にこだわらずなく活動的に季節に応じた衣服を構成してあり地域的な差異は認められなかった。